

公家政治家東久世通禧

五卿の一人東久世通禧は天保4年(1833)11月22日京都で生まれまし
た。幼名を保麿といい、10歳のとき
から童形として御所に入り、2歳年
上の皇太子統仁親王(のちの孝明天皇)
につかえて、学問や手習いのお相手
を勤めます。弘化3年(1846)に
親王が即位したため通禧は引き続き
天皇の側につかえ、嘉永2年
(1849)、16歳の時に侍従
に任命されました。

当時の政治情勢は対外政策
については開国か攘夷かで、
政治体制については尊皇か公
武合体かで揺れ動く複雑な状
況にありました。幼い頃から
天皇に近仕していた通禧は尊
攘派の公卿の一人として台頭
し、朝廷と長州藩などの尊攘
派勢力とを結ぶ中心的な人物となり
ます。しかし公武合体派の反発を受
け、文久3年(1863)8月18日の未
明、朝廷内の尊攘派は京都御所から
締め出されてしまいます。その結果、
三条実美、東久世通禧ら七卿は長州
藩の兵に守られて京都を落ち、その
うちの五卿が最終的には大宰府へ辿
り着きます。

太宰府人物志

資料室だより⑥

慶応3年(1867)徳川慶喜の大政
奉還と明治新政府の発足により五卿
の軟禁は解かれ、通禧は新政府の重
要ポストに抜擢されます。外国事務
取調掛、外国事務総督、外国官副知
事を歴任するかたわら、兵庫、横浜
両裁判所(現在の役所のこと)総督
を兼務するなど、もっぱら外務関係
の要職にたずさわりました。また明
治2年(1869)には二代目の北海道
開拓使長官に就任します。任
期は2年余にすぎませんでし
たが北海道開拓の基礎づくりに
果たした功績は小さくあり
ません。その後、明治4年に
侍従長に任命され再び宮中に
召されました。

大宰府滞在中のエピソード
としては、中岡慎太郎からか
つての政敵岩倉具視との復縁
を働きかけられた際に、これ
を拒む実美に対して通禧が岩倉の人
物を賞賛し実美に翻意を促したこと
が知られます。その後の明治政府の
中枢を担った2人の仲介に一役買っ
ていることは、通禧の政治家として
の資質の高さを示していると言える
でしょう。